

「病」とその機製の創出

— ゲオルク・ビューヒナーの断片『レンツ』における改変をめぐって —

佐々木 茂 人

〈Kurze Inhaltsangabe〉

Im vorliegenden Beitrag versuche ich anhand des Erzählfragments „Lenz“ von Georg Büchner (1813-1837) zu beweisen, dass Büchner den Mechanismus des „Wahnsinns“ bei dem Protagonisten erfand, indem Büchner die Materialien des Fragments teilweise änderte. Dabei stütze ich mich auf folgende zwei Materialien: die Nachricht von Oberlin, der als Pfarrer ohne Erfolg dem Kranken zu helfen versuchte, und die „Mitteilungen“ von August Stöber, der Büchner die Nachricht persönlich anbot und gleichzeitig deren Inhalt in einer Zeitschrift veröffentlichte.

Seit jeher diskutierte man über Lenzens Krankheit, besonders über den Grund des „Wahnsinns“. Einige sprachen von „Manie“ oder „Melancholie“, die in der Lebenszeit Lenzens bekannt wurden; Andere von „Schizophrenie“, die man damals nicht beim Namen kannte, geschweige denn ihre Symptome. Büchner ging nicht dieser Diagnose aus, sondern stellte durch die Veränderungen ein völlig anderes und originelles Bild der Krankheit dar. Damit versuchte er als Literat in den damaligen Diskurs über Psychiatrie einzugreifen.

はじめに

18世紀ドイツの劇作家、ヤーコプ・ミヒャエル・ラインホルト・レンツ (Jacob Michael Reinhold Lenz 1751-1792) は、疾風怒濤期 (Sturm und Drang) に、一時はゲーテと並び称される時代の寵児であった。『鉄の手のゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン *Götz von Berlichingen mit der eisernen Hand*』(1773年)で、ゲーテが擬古典主義の演劇規範を打ち破ると、レンツはそれを高く評価し、ゲーテはゲーテで、レンツによる古代ローマの劇作家プラウトゥスの翻案を賞賛し、『家庭教師、あるいは家庭教育の利点 *Der Hofmeister, oder Vorteile der Privaterziehung*』(1774年)、『新メノーツァ *Der neue Menoza*』(1774年)などの出版に尽力した¹⁾。

しかしながら、1776年、レンツは、そのゲーテの逆鱗に触れてヴァイマルの宮廷から追放される。この醜聞の原因は、宮廷でのレンツの無作法な振舞いにあったとも、シュタイン夫人をめぐる二人の痴話沙汰とも言われ、未だ判明していない²⁾。いずれにせよ、金策と後ろ盾を同時に失った若い劇作家は、その後、知人らを頼ってスイスやアルザスを転々とする。その間、にわかにかに統合失調症と目される症状を呈し、ヴォゲーゼン (ヴォージュ) のヴァルトバッハ (ヴァルダースバッハ) の教区シュタインタールへ送られた。同地で、そうした病の治療に覚えのある牧師のもとへ預けられたのである。

近代精神医学が産声をあげてもいない時³⁾のことである、かりそめにも宮廷に出入りした文人

が心の闇に落ち込む事態は、それだけで十分に耳目を集めるスキャンダルであった。先の宮廷を舞台にした珍事も相まって、しぜん、レンツへの関心は、彼の遺した作品群を評価する試み以上に、レンツその人——その「狂気 (Wahnsinn)」や「気狂い (Verrückung)」の原因の究明に集まった。こうして、時代の寵児だった劇作家は、ドイツ文学史上ではながらく「わき役 (Randfigur)」に追いやられることになるのである。さらにレンツの周縁化に寄与したのが、ゲオルク・ビューヒナー (Georg Büchner 1813-1837) の未完遺稿『レンツ *Lenz*』(1839年) だった。

この「物語断片 (Erzählfragment)」は、シュタインタール逗留時のレンツ、すなわち心の闇にとらわれていた時期のレンツ——ことに「狂気」に翻弄される劇作家に叙述の焦点をしばり、いわば狂えるレンツ像を、文学界のみならず文学研究においても「刻印」する役割を果たした。「レンツへの興味関心が高まったのには、とりわけ、この実在した人物 (Person) が、ビューヒナーの断片の同じ名をもつ人物 (Figur) と同定されたことが大きい。ビューヒナーの虚構のテクストにより、レンツの病像、のみならずその人物像が刻印されはじめた。それは学問研究にも言えた」⁴⁾。

だがしかし、今世紀転換以降、伝記研究の新たな進捗とともに、「狂気」の劇作家の汚名は返上され、作品も再評価がはじまっている。ゲーテに「流れ去る彗星として、一瞬ドイツ文学の地平線をかすめ、この世に何の痕跡も遺さず、こつ然と消え去った」⁵⁾と総括をされた晩年にも、ベルリンの壁崩壊とともに「発掘された」資料により新たな光が当てられている⁶⁾。一方で、ビューヒナーの断片『レンツ』の研究そのものは、未だに——あるいは、心の病が日常的な事態になった今だからこそ——「病」から脱却できずにいる。

なるほど、たしかにビューヒナーは、表現主義 (Expressionismus) を先取りするかのような手法で、病める劇作家の内面に肉迫し、その狂気の様相を徹底的に表出しようとしている。ビューヒナーが創作に携わった当時、利用できる資料が制限された状況下では、対象となる人物の人生の断面、なかでもその特徴的な断面に着目するのは、奇を衒ったからというよりは、むしろ合理的な判断からだったと言えるだろう。しかしそれでもなお、ビューヒナーが自らの医学的見識に照らして、それでなくても文学界の「薄幸な (arm)」劇作家を、さらに貶めようとしたとは考えられない。レンツの諸作品なくしては、ビューヒナーの傑作の数々は、産み出され得なかったかもしれないからである⁷⁾。

本稿からはじめる一連の考察は、その「病」や「狂気」の位相から、今なお「精神医学的 (psychiatrisch)」ないし「病跡学的 (pathographisch)」関心を誘発してやまない断片『レンツ』を、いずれの学的視点にも絡みとられずに、描かれた「病」そのものから読みなおす試みである。その基礎的作業として、本稿では、ビューヒナーが執筆にあたってもっとも利用した資料、シュタインタール教区の牧師オーベルリンの手記を手がかりに、作中のレンツの「病」、とりわけ「狂気」の発作を生じさせる機制 (Mechanismus) が創作されようとしたことを証明する⁸⁾。

議論に入る前に、レンツの伝記、あるいは伝記研究につきまどってきた「病」の言説、ここで

はビューヒナーの創作時までの言説を、駆け足でたどっておきたい。

1. 文学的評価と「病」のはざままで

生前レンツは、先の二編の喜劇、『家庭教師、あるいは家庭教育の利点』と『新メノーツァ』を知られるのみで、他の作品群が顧みられることはなかった。没後すぐ、知人であり、観相学で知られるラファーター（Johann Kaspar Lavater）と、シラーが、各々遺稿を整理して出版し、忘れられた劇作家に注目を促すものの、レンツの活躍した1770年代の文学評価に一石を投じることはなかった。先述のごとく、その後にレンツ受容は、一貫して伝記的エピソードへの関心に傾いてゆくが、契機となったのは、先にも触れた、1814年に出版されたゲーテの『詩と真実 *Dichtung und Wahrheit*』第三部の叙述だった⁹⁾。

ゲーテとレンツが、一時は互いに才能を認める間柄であったことは、すでに述べた。ただし、この「半自伝」において、ゲーテが言及する他の知人たち、たとえばクリンガー（Friedrich Maximilian von Klinger）やラファーターの人となりの描き方と比較すれば、レンツのそれには、いささか悪意のこもった辛辣さが目立つ。たとえば、彼の「尽きることのない創造性（unerschöpfliche Produktivität）」を認めるかと思えば、それを「あくまで病的なもの（durchaus kränkeln）」と一蹴し、「好ましい繊細さ（liebliche Zärtlichkeit）」は「もっとも馬鹿げた奇妙な悪ふざけ（albernste und barockeste Fratze）」と結びつけられ、その生きた日々は「無に過ぎない（lauter Nichts）」と一括されるのである¹⁰⁾。これは、後年のゲーテが、自分の記憶——むろん、そこには例の宮廷での一件も含まれるだろう——を「後世のレンツ批判に合わせた」からだとも（78）、次に述べるように、ゲーテが、レンツという実在した人物に、いわば若気の至りをすべて負わせ、「自らの疾風怒濤期からの決別」のアイコンにしたからだとも解されている。解釈の如何は別にしても、同時代を生きた文豪の回想は、一方的で歪んだレンツ像を不可塑的に固めてしまったと言える。

ともあれ、その後1828年に、レンツの評価の機運はほんの一時高まりをみせる。フェルディナンド・フォン・エックシュタイン（Ferdinand von Eckstein）が、この年にレンツのモノグラフを上梓し、作品を詳細に、しかもきわめて好意的に論じたのである。エックシュタインによれば、劇作家レンツは、人間の弱さと愚かさを深く見通し、人間への愛情をリアリズムと結びつけたというのである。図らずも、同年には、ロマン派の作家ルードヴィヒ・ティーク（Ludwig Tieck）が、レンツの作品集（“*Gesammelte Schriften von J. M. R. Lenz*”）を公にし、ここにはじめて包括的な作品像が提示される。ただし、ティークの意図は、不遇の劇作家を文学界へ蘇らせることにはなく、レンツを盾にして疾風怒濤期の自分から距離をとった若きゲーテを「寿ぐ（Feier）」ためだった。レンツのリアリズムを掬い上げて、古典主義以前のゲーテを再評価しようとしたのである。

初期のレンツ受容全体を導いたのは、しかし、そうしたリアリズムと古典主義を俎上にのせる

類いの文学史的企図ではなく、むしろレンツの伝記上の「精神病理学的 (psychopathologisch)」な「変化 (Wendung)」, すなわち狂える劇作家が発病した動因への関心だった。レンツの没後、二年と経たない 1794 年には、先のラファーターが、「愛の苦しみ (Liebesleid) と精神崩壊 (psychischer Zusammenbruch)」を結びつけようと試みた。それからさらに二年後の 1796 年には、ヨハン・フリードリッヒ・ライヒャルト (Johann Friedrich Reichardt) が、ラファーターが特定しなかった「愛の苦しみ」の対象を、レンツが宮廷追放後に一時身を寄せ、産褥で不幸な死を遂げたゲーテの妹コルネーリア・シュレッサーと同定した¹¹⁾。

ところで、歪んだレンツ像の確立におおいに寄与したゲーテの『詩と真実』もまた、レンツの「狂気」の原因に説明を試み、「時代の思想 (Zeitgesinnung)」によるものと仮説を立てている。ゲーテの回想によると、疾風怒濤期には、「われわれを内的に不安ならしめる一切のものを、悪しきもの、排除すべきものと断言しようとも、すべてを是認しようともできない (alles was uns innerlich beunruhigt, für böse und verwerflich erklären wollte, aber doch auch nicht alles billigen konnte)」「経験心理学 (empirische Psychologie)」により「永遠に収束することのない闘い (ein ewiger nie beizulegender Streit)」が生じたという。そして、ゲーテ自らはその「闘い」に『若きウェルテルの悩み』で決着をつけたが、レンツはその「時代の思想」について取り憑かれたままだったというのである¹²⁾。もっとも、ゲーテはこの仮説を自分では敷衍せず、次の世代に「プロジェクト (Projekt)」として託したが¹³⁾、ともかくレンツ像を打ち立てたのみならず、レンツの「病」をめぐる言説に介入もしていたのである。

レンツへの伝記的関心は、その後もとどまるどころを知らず、1831 年には、ビューヒナーと知己であったアウグスト・シュテーパー (August Stöber) が、1772 年のレンツの書簡を集めた書簡集 (抄) を刊行している。この書簡集で注目されるのは、レンツ自身により、「愛の苦しみ」の対象が、ゲーテの婚約者であったフリーデリケ・ブリオン (Friederike Brion) であったと告白されていたことである。さらに、時間は少し前後するが、1826 年に、アウグストの兄エーレンフリート・シュテーパー (Ehrenfried Stöber) が、ビューヒナーの断片『レンツ』の最重要資料となった牧師オーベルリーンの手記を発見していたが¹⁴⁾、それを引用する形で弟のアウグストが、やはり 1831 年に、『教養人の朝 *Morgenblatt für gebildete Stände*』紙にレンツの短い伝記を発表する。その詳細な検討は次節にゆずるとして、この記事においてシュタインタール時代の「狂気」の様が、はじめて公になる。

レンツの同時代からビューヒナーの同時代までの言説を概観して分かるのは、間欠泉のごとく噴出しかける文学的評価を、レンツの「病」が、ことごとく押しとどめた事実である。ビューヒナーが、レンツを題材とするにあたり、そうしたせめぎ合いを目の当たりにしていたのは言うまでもない。むろん、同じことは仮想される読者にも当てはまる。とすれば、断片『レンツ』の創作をめぐる問題は、読み手も共有していたであろう、レンツに関して競合する言説に対し、ビューヒナーがどのように「介入 (Eingriff)」を試みたかという問いに集約される。その試みこそが、『レンツ』を『レンツ』たらしめている根本原理と言っても過言ではない。

次節から、ビューヒナーの「介入」の試みを検証すべく、アウグスト・シュテーパーの記事、ならびにオーベルリーンの手記を手がかりに、断片を今一度読み解いていくが、その前に、そもそもレントスが罹患したと考えられていた心の「病」について、二つの先行テキストが表明している見解に立ち入っておきたい。これも「介入」の試みを読み解く準備作業となるからである。

2. 二つの診断書

レントスの同時代人の証言に耳を傾け、先行テキストの記述に目を凝らすと、レントスの「病」は、18世紀から19世紀半ばにかけて、各人各様に名指され、定義されてきたことが分かる。単なる「気狂い」にはじまり、「愛の苦しみ」の果ての「精神崩壊」、さらにはゲーテのいう「時代の思想」への執着という仮説、あるいは断片『レント』に明記された「無神論 (Atheismus)」(22)に至るまで、実にさまざまな診断が下されてきた。病者としてのレント像ばかりか、その病の内実についても言説が入り乱れていたのである。

断片『レント』の試みを検証するにあたっては、そうした言説を検証すべきなのはもちろんだが、ここではそれらをひとまず措いて、いま二つの診断を優先して検討すべきだろう。というのも、それらの診断は、『レント』の読者にとって、もっとも新しく上書きされた、その意味でもっとも参考になりうる「診断」だったからである。「心気症 (Hypochondrie)」と「憂鬱症 (Melancholie)」が、それぞれの診断名である¹⁵⁾。

レントを「心気症」と診断したのは、シュタインタールから事実上放擲された劇作家を、友人として引き取ったシュレッサーである。かつての庇護者オーベルリーンに宛てた1778年3月2日付けの書簡¹⁶⁾のなかで、レントの行状を次のように報告している。

彼(レント — 引用者注)の病は、[・][・]本物の心気症 (wahre Hypochondrie) だと分かりました。きっと治せると思って、今日ある提案をしてみたのですが、彼は子どものようです。決断はできないし、神も人も信じていません。当地(エメンディングゲン — 引用者注)では、二度も怖い目に逢わされました。それをのぞけば、ふだんは穏やかにしています。彼がいなければ、あなたに宛ててもっと自由に手紙を書けるのですが、彼はわたしに殴りかかっては、この哀れな胸を苦しめるのです。(傍点は引用者による)

この書簡は、件の『教養人の朝』(1831年10月20日付け)の連載記事「報告 詩人レント Der Dichter Lenz. Mitteilungen.」¹⁷⁾に引用されたもので、後にアウグスト・シュテーパー自身によりまとめられる『詩人レントとフリーデリケ・フォン・ゼーゼンハイム Der Dichter Lenz und Friederike von Sesenheim』(1842年)に再録された。言うまでもなく、生前のビューヒナーが知っていたのは — また、断片発表の時点(1839年)で、読者に知られていたのは — 前者の記事のみである。

シュレッサーがいう「心気症」とは、レンツの生きた時代の精神医学では、自覚症状としての身体愁訴（何となく体調が悪いという自覚症状）はあるものの、それに見合うだけの他覚的な身体所見を認めない、という症状を指した。平たく言えば、本人に自覚はあるものの、本人以外は客観的に判断できない症状である。ゆえに、当時は、病とその人自身の性格との線引きが難しく、ドイツ語では「気むずかし屋」や「不平家」を意味する「Griesgram」が、この症状を指すのに多用されていた¹⁸⁾。なお、アメリカ精神医学会が、1980年に精神疾患の診断基準であるDSM-III (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Third edition) を定め、さらに、WHOが1992年に、国際疾病分類ではICD-10を定めて以降は、他の精神症状をフィルタリングしたあとで、「身体表現性障害」の一障害として診断されている¹⁹⁾。

書簡の短い記述から読み取れる「症状」——すなわち「子どものよう」で「決断」力に欠け、他者への信頼も信仰心も失い、暴力をふるう——から、シュレッサーは、病と性格の境界線上にあった当時の「心気症」のイメージを踏まえて、レンツの「病」を診断したと考えられる。問題は、シュレッサーにあっては曖昧であった「心気症」が、記事のなかで描かれる「狂気」の発動機制と、必然的に関連させられてしまっていることだろう。シュテーパーは、シュレッサーの診断を記事の末尾に添えることで、「狂気」が最終的に「本当の心気症」に至る過程を作り出しているのである。

シュテーパーによれば、シュタインタールへ送られる前に、レンツはエルザスで「発狂」する。「当地（エルザス——引用者注）で、彼（レンツ——引用者注）がしばしば見せた、ぼんやりと思ひ悩んだり、不安な憂鬱に沈んだりする心は、完全な狂気 (voller Wahnsinn) となり、それは時として恐ろしい半狂乱 (tollste Raserei) になった」²⁰⁾。その後、オーベルリーンの元で、「狂気は、じつにさまざまで、どぎつい形 (die verschiedenartigsten, grellsten Gestalten) で現れ、」²¹⁾「その病状に身と心、肉と霊²¹⁾は痙攣し、彼の人となりはすっかり荒々しくなった」²²⁾とされる。これらの病状の推移の最後に、先ほどのシュレッサーの書簡は置かれている。その意味で、「心気症」とは、シュテーパーによる「報告 (Mitteilungen)」という名の診断書に記された病名と化すのである。ここでの「心気症」は、単に「気むずかし屋」と隣接する、判断が困難な病ではなく、身体のみならず、精神や信仰にまで浸食する、性格とも結びついた「精神病」の相貌をおびていると言っても過言ではない。

シュテーパー同様にオーベルリーンも、「報告 (Nachricht)」を診断で締めくくっている。ビューヒナーが、手記の記述を利用していない箇所でも (30)、当の手記は、発作を「憂鬱 (症)」によるものと同定しているのである。例を引くなら、「でも、あなたは憂鬱 (Melancholie) に襲われると、自分を制御できなくなってしまう」(46)、あるいは、「憂鬱の発作 (die Anfälle der Schwermut) が収まってしまえばすべてが問題ないように見え」(Ebd.) た、などのように発作と「憂鬱」は必ず組み合わされている。さらにオーベルリーンは、「病」の原因究明にまで筆を進め、レンツの「計り知れない苦悩 (seine unermessliche Qual)」が、その「主義原則 (Prinzipien)」の招いたものと断言する。

わたしが彼（レンツ — 引用者注）の側において、当世の流行本が吹き込む主義原則（Prinzipien）の結果、たとえば父親への不服従、あてもなくさまよう生活（herumschweifende Lebensart）、目的を定めず（unzweckmäßig）職を転々とする事、婦人方との度重なる交遊などの結果をすっかり知らされると、わたしの心は、穴をあけられ細切れにされたように辛かった。（46f.）

誤解が生じないよう付け加えておきたいが、オーベルリーンの心が痛むのは、レンツに「共感（Sympathie）」を覚えるからではない。レンツは、あくまで「同情」ないしは「遺憾」の対象（bedauernswürdig）なのである。「何しろわたしと彼の主義原則（Prinzipien）は、互いにまったく相容れないもの、少なくとも全然違うものだったからである」（47）。レンツの「主義原則」が、引用に挙げられた「流行本（Modebücher）」²³⁾に影響を受けた放埒な生活に具現化されているとすれば、それを自分とは異質なものとして排除するオーベルリーンの信条は、「保守的な宗教性（konservative Religiosität）」と「進歩主義的な社会政治の実践（progressive sozialpolitische Praxis）」²⁴⁾であった。

断片『レンツ』に採用されているのは、そんな信条のなかでも、とりわけ「敬虔主義的な信仰（pietistische Frömmigkeit）」と「神秘主義（Mystik）」である。牧師は、カウフマンの友人であり、著書を知っているという理由だけでレンツを迎え入れたことを、「神の定め（Schickung Gottes）」と見なし（13）、発作に襲われ、自分は人殺しだとうわ言を叫ぶレンツに「帰依（sich bekehren）」を勧める（23f.）。そして、レンツが自分を救わない神を責めると、「神への冒瀆（Profanation）」だと一喝するのである（29）。多面、橋の上で見えない手につかまされたり、頂の光に目がくらんだりといった、自ら体験した不可思議な出来事を話して聞かせ（10）、山々に住まう人々の、迷信とも解されかねない噂を伝えたりする（12）。「進歩主義的な社会政治の実践」は、冒頭で谷を視察する場面（8f.）でわずかに触れられるにすぎないが²⁵⁾、レンツが「説教する（predigen）」きっかけも、じつは言語的に孤立していたシュタインタールに標準フランス語を持ち込もうとして住民の反感を買ったからであり²⁶⁾、スイス旅行の折（17）にも、エメンディンゲンに近いケーンドリングゲン（Köndringen）に立ち寄り、同区の「教区監督（Superintendent）」で「教会役員（Kirchenrat）」であったニコラウス・ザンダーを訪れて、その進歩的な学校制度を見学しているのである²⁷⁾。

同時代人の回想も、信条を守る「実直な（redlich）」な牧師を讃えて止まない。その道程は、なにより先代の牧師シュトゥーバーが、「自らの財産をささげて導いた人々」を率いていく使命感に貫かれていた。シュタインタールの住民は、「開化された世界から切り離され、厳しく不毛な谷に暮らしている」。彼らは「恐ろしく無知」なので、「理性にもとづいて彼らの農業（Ökonomie）を指導し、教育を施し、あらゆる困難に助けの手を差ししのべ」なければならないのである²⁸⁾。この意志を引き継いだオーベルリーンが、教区改良をつねに思い描いていたのは言うまでもない。のみならず、教区の民から信頼され、身も固めているオーベルリーンにしてみれば

ば、レンツはまるで真反対の人間、語弊を承知で言えば、社会的な「行動能力 (Handlungsfähigkeit)」を欠いた人間であった。他ならないオーベルリーンの下した診断名「Melancholie」が、レンツをこの範疇に分類しているのである。

古代ギリシャから現代までの「Melancholie」概念と精神医学との関係をたどり、その変遷史まとめたシャイデッガーによれば、古来より創造性や洞察力の源であった「Melancholie」が、18世紀に「精神病理学的現象 (psychopathologische Phänomene)」にされてしまった原因には、「ためらい (Rückhaltung)」に端的に示される「行動能力の喪失」が挙げられるという²⁹⁾。「行動能力の喪失」は、反社会的であるという理由で、「病」というカテゴリーに移されるのである。

ためらいの態度を示す個々人は (中略)、無秩序 (Anomie) を実践するがゆえに、社会を形成することができない。つまり、その個々人は、受け身という逸脱形式によって、直接手を下さずして、社会を疑問視させてしまう。憂鬱質の者 (Melancholiker) は、いわば社会の秩序概念に真っ向から対立する。彼らの態度は、社会の機能に寄与せず、非・秩序を生み出すため、不適切だと受け止められるのだ。

オーベルリーンが手記で挙げてみせる、それ自体はレンツの人生を何気なくたどるように見える「症状」は、実のところ同時代の社会を震撼させかねない「不適切な」「態度」なのである。レンツのように、各人が、自分の親の意向にそぐわず、自堕落な生活を送り、一定の職業につかず、女性との交遊に現を抜かしていれば、畢竟社会は秩序を失ってしまう。オーベルリーンは、時代の「病」としての「Melancholie」への危機感を共有し、その具現化をレンツに見いだしていたのである。「憂鬱 (症)」とは、社会の役に立たない (立とうとしない) 人間が必然的に罹患する、社会環境的な「病」なのである。むろん、「狂気」がこの付置関係のなかに置かれ、その苦悶が宿命論——反社会的である限り苦しまざるを得ない——に秘かに支えられていることは言うまでもない。

断片『レンツ』の直前に現れた二つの診断——「心気症」と「憂鬱症」はいずれも、先行する言説ながら、ビューヒナーにいささかなりとも採用されることはなかった。それどころか、ビューヒナーは、それらをまるで無視して、レンツの「病」の「精神病理学的」診断にはいっさい踏み込まず、ひたすらその「苦痛 (Qualerei)」の様相を叙述している³⁰⁾。近代精神医学で言うところの「臨床にもとづく (klinisch)」「記述的 (deskriptiv)」アプローチを思わせるが、ビューヒナーのそれは、外的観察と病者の言葉から——断片で言えば、先行するテキストや資料から——症状を客観的に書き取る態度ではない。正確を期するならば、資料を自由に組み合わせて症状を書き出す態度である。つまり、ビューヒナーは、レンツの「病」および「狂気」の機軸 (Mechanismus) を創作しているのである。次節では、この創作という「介入」を、一次資料に加えられた二つの変更点から具体的に明らかにしたい。

3. 創られた「病」

3.1. 函数としてのオーベルリーン

オーベルリーンが、「保守的な宗教性」と「進歩主義的な社会政治の実践」を信条とする人物であったとは、前節で述べた通りである。断片『レンツ』においては、やや前者の描写、とりわけ敬虔さと神秘的傾向の描写に偏るきらいはあるが、教区改革者の面にも触れられていた。ビューヒナーが用いた一次資料はもちろんのこと、他の伝記資料も、この両面を補足する。肝心のレンツの「狂気」に話を限るならば、「オーベルリーンは、彼（レンツ — 引用者注）の頭がそれを許すならば、持続的で有用な仕事に就きたいと思うように導いてくれる、たぶん唯一の男」³¹⁾と考えられていた。事実、牧師はその期待に応えようとする。

シュテーパーは先の記事で、オーベルリーンが病んだ劇作家に尽くす様子に言及している。「オーベルリーンは、この不幸な者（レンツ — 引用者注）が押しつけた重荷に、とても我慢強く耐え」、発作のないときにレンツが示す「豊かな、愛すべき心根に、深い痛みを感じ」ていた³²⁾。牧師自身も、発作に翻弄されるレンツに真剣に向き合う、「いいですか、わたしたちはあなたを愛しています。それはあなたもご存知のはずです。そしてあなたが、わたしたちのことを愛しておられることも、わたしたちはよく承知しております。あなたが自殺などしようとなさっても、症状を悪くしさえすれば、良くすることはないので」（46）と。もっとも、断片のレンツの視座に立つならば、そこから得られる牧師の「姿」とは、そうした隣人愛を体現し、実践しようとする姿ではなく、何よりもまず寄りすがりたいた、「救済（Rettung）」をもたらしてくれるはずの「姿（Gestalt）」（17）であった。

オーベルリーンのスイス旅行が「心に重くのしかかった」（17）レンツは、「果てしない（unendlich）苦悩から逃れるために、不安におののきながら、ありとあらゆるものにしがみ」（Ebd.）つく。恐ろしい不安を無理にふりはらい、同じく「計り知れない（unendlich）」力に脅かされながら、レンツはその負の「果てしなさ／計り知れなさ（Unendlichkeit）」に対峙すべく、牧師の「姿」を希求する。

それで彼（レンツ — 引用者注）は、いつも自分の目の前に浮かんでくるあの姿（Gestalt）に、そうオーベルリーンに救いを求める。オーベルリーンの言葉と面差しが、彼には限りないほど（unendlich）快いのだ。だから彼は不安な気持ちでオーベルリーンの出立が近づくのを迎える。（Ebd.）

むろん、そのような「姿」が見えなくなれば、レンツの病状は暗転するほかない。伝記的事実を参照すれば、後に精神の均衡を崩すのには変わらないが、それでもレンツは、オーベルリーン不在時に、ラファーターに書簡を送り、シュタインタールの住民の影絵を何点か包んで、鑑定を促していたりする³³⁾。いささか諧謔にすぎる書面は、不安定な精神状態の反映と解釈できるもの

の、断片『レンツ』がこの間を埋める、「無神論」への急転直下とは違った一面もあったことが分かる。断片では、子どもの死と復活の失敗（21f.）の後に、レンツの病状は悪化の一途をたどり、牧師が戻る頃には信仰への懐疑は決定的になっていた。そして、作中でカウフマンが最初に論ず言葉（16）に、さらに聖書の詩句（「父母を敬うのです」）を加えて繰り返す牧師に向かって、レンツは言い放つ、「神への道はあなたのなかにしか見いだせません。ですが、わたしはおしまいです。わたしは神に背いたのです。永遠に呪われたのです」（23）。

子どもを死から救えなかったレンツは、神を冒瀆する振舞いに出る（22）。先の引用の、とくに後半部分は、その行為を踏まえている。しかし、前半の部分は、現在の信仰の可能性とその否定に関わっている。「信仰（Glaube）」が、動詞表現「信じる（glauben-an）」から派生し、「への信仰を持つ（Glauben-haben-an）」という志向性を有すると考えるなら、レンツは、自らの信仰の志向性が、まだなおオーベルリーンという仲介者に担保されているのを確認しながら、それでも（doch）自分ではもはやそれにすがれないと嘆いているのである。先に述べたように、すでにスイス旅行の前に、牧師不在に備えるための「防衛機制（Abwehrmechanismus）」ははじまり、オーベルリーンはこの「機制」にかけられた保険であった。その後も発作の度に、レンツはこの「誰とも違う（ausgenommen）」オーベルリーン存在（27）を、その仲介者としての役割を確認している³⁴。

牧師オーベルリーンの役割を、レンツの立場から捉えなおすと、最終的にレンツが牧師に何ら期待しなくなる、あるいは牧師がレンツに何も与えられなくなる³⁵のには、断片末尾のある種の「教理問答（Katechese）」によるところが大きいと考えられる。

オーベルリーンは彼（レンツ — 引用者注）に神のことを話した。レンツは静かに身をほどくと、果てしない苦悶の表情を浮かべ、彼を見つめて、やっとう言うのだった。「ですが、わたしが、わたしが全能でしたら、いいですか、わたしがそうでしたら、このような苦悶を、指をくわえて見てはしません。わたしだったら救ってやります、救ってやります。わたしが求めているのは、ただ安らぎ、安らぎだけなのです。ほんの少し眠れるだけの安らぎですよ」。オーベルリーンは、それは神への冒瀆だと言った。レンツは絶望したように首を振った。（29）

レンツにとって牧師オーベルリーンは、そのなかに信仰への道がまだ微かに残されているからこそ、すがるべき存在である。言うなれば、牧師には期待通りにレンツの「病」を治癒する能力があったのである。しかし、レンツが神への懐疑を口にした途端、牧師は「神への冒瀆（Profanation）」と強い拒絶の言葉を口にする。この宣告は、レンツからオーベルリーンを切り離す決定的な要因になる。もはや救い手を喪ったレンツは、「完全な無感情（vollkommen gleichgültig）」になり、「冷やかな諦め（kalte Resignation）」（30）を覚えるだけである。オーベルリーンがレンツの「病」の、「狂気」の発作の引き金（Auflöser）になったと主張するつもりは

毛頭ないが、病めるレントスを救う可能性を持ちながら、少なくとも結果的には悪化を助長してしまった。ビューヒナーは、レントスの「病」の「機制」に、オーベルリーンという人物を可變的な要素として、すなわち函数として組み込んでいたのである。

3.2. 欠落したフリーデリケ連想

一次資料に照らしても、他の伝記資料に照らしても、牧師オーベルリーンが、レントスの「病」の悪化に一役買ったという証言は、見当たらない。ましてや、レントスの絶望を決定づけた牧師とのやり取りは、見当たるべくもない³⁶⁾。その意味では、「狂気」の「機制」に関わる牧師は、完全にビューヒナーの手になる改変である。同じ改変による「機制」の「発明 (Erfindung)」は、第一節で確認したラファーター以降に現れた、「愛の苦しみ」と「狂気」を結びつける言説にも適用されている。

繰り返しになるが、ラファーター自身は、レントスの恋慕の対象を同定してはいなかった。つづくライヒャルトをまっけて、その対象がゲーテの妹コルネーリア・フリーデリケ・シュレッサーと措定される。レントスはじっさいのところ、この女性のもとに寄寓しており、金銭面のみならず、何かにつけて援助を受けていた。それだけに、彼女が産褥で命を落とした際には、狂気の発作にも似た突発的な行動を犯してもいる。他方で、1831年に刊行されたレントスの書簡集(抄)では、同名とはいえ、ゲーテの妹ではなく、ゲーテのかつての婚約者であったフリーデリケ・ブリオンとの関係が、レントスを苦しめたと、本人によって証明された。シュテーパーも、これを踏まえて記事にフリーデリケ・ブリオン説を採用している³⁷⁾。

二人のフリーデリケのどちらが、「狂気」の発作に関わったのか、少なくともレントスの苦悩の対象はどちらであったかについては、書簡集の記述ですでに決着がついている。しかし、いずれのフリーデリケも知らなかったオーベルリーンの手記が、図らずも明らかにしたように、フリーデリケはその名を持った特定の個人を指すのではなく、むしろその名によって連想的に「狂気」を引き起こす記号になっていた。手記は記す、「わたし(オーベルリーン——引用者注)は、さらに次のことを聞いた。L氏(レントス——引用者注)が、一日断食をした後、顔に灰を塗り、ぼろぼろになった麻袋を求め、如月の三日、フーディで亡くなったばかりの子ども——その子はフリーデリケ(Friederike)という名だった——を生き返らそうとしたが、失敗したと」(38)。当該の子どもの名前が「フレデリック(Frédérique)」だったことは、他の資料でも確認できる³⁸⁾。レントスは、不在のオーベルリーンに替わり、死の床にあった子どもに薬(Arznei)を処方したが、思った効果を得られなかった。それが、フリーデリケという名とも重なって強い罪責感となり、その子が亡くなった後、レントスはキリストの復活を思わせる儀式を敢行したのである³⁹⁾。

問題は、精神疾患に見られる、この種の非論理的な連想が、断片『レントス』からすっぱり抜け落ちていた事実であろう。ビューヒナーは、オーベルリーンの手記からレントスの動向を知りながら、子どもに「フリーデリケ」という名前を与えなかった。さらに注目すべきことに、手記で報告されている同じ子どもの二度の訪問——診療の際と葬儀の際——が、断片では一度の訪問に変

更され、しかもこの一度の訪問を描くにあたっても、やはり名前には言及されていないのである。この改変は何を意味するのであろうか。件の場面を時系列に沿ってバラフリーズしてみよう。

牧師を見送った「レンツには、いま一人で家にじっとしているのは気味悪い (unheimlich)」(17) ので、シュタインタールの谷間を当て所もなくさまよう。道に迷い、外が夕闇に包まれたころ、彼は「人気のする小屋」にたどり着く (18)。場所が定かでないこの小屋には、老婆と「なかば目を開けた (mit halb geöffneten Augen)、青白い顔をした少女」が寝起きしている。この少女が罹患していることは、断片で「病者 (Kranke)」(Ebd.) と言い換えられている点から明らかである。また、死期が迫っているのも、彼女の表情が「気味の悪い (unheimlich) 輝きを放」ち、「幽鬼めいている (geisterhaft)」様子に仄めかされている (18f.)。一方のフーディで亡くなった子どもは詳しく描かれていないが、「なかば開いた (halbgeöffnet) ガラスのような目」(22) をしているとされ、表現上での結びつきがかりうじて確認できる。いずれにしても、大幅な変更が加えられていることに違いはないが、実はこの変更、「狂気」を発動するための伏線として機能している。

先の少女を訪問した折に、レンツは、彼女を癒す「聖人とうわさ (im Rufe eines Heiligen)」される男に出会い、この人物に対して「気味の悪い (unheimlich)」印象を抱く。「いま彼 (レンツ — 引用者注) には、この荒々しい (gewaltig) な男が気味悪かった。とてつもない声で話しだすように思われたのだ。自分がひとり孤独 (einsam) なのも恐ろしかった」(19)。レンツはこの「荒々しさ (Gewaltigkeit)」に取り憑かれ、その傍ら「孤独 (Einsamkeit)」を埋めようとする。その役割は、とりえあえず牧師の夫人に移譲され、レンツは「とくにオーベルリン夫人と一緒に過ご」す (20)。オーベルリンのいない今、親しく世話してくれる夫人にすがるのは、必然かと思われるが、その間に「女中 (Magd)」は別離を暗示する小唄を口ずさみ、それに併せてレンツの「あの婦人 (das Frauenzimmer)」への執着⁴⁰ が噴出する。この過程をたどれば、一連の流れは何の意図もなく挿入されたとは考えにくい。思えば、先の小屋で遭った少女も歌い (18)、レンツの女性への執着も、本来ならば、夫人ではなく帰郷したオーベルリンとの会話でやり取りされていた。ここからフーディの子どもの死まではほんの一息である。断片は、子どものエピソードから名前による非論理的連想を抜き取り、新たなエピソード的連想 — それは、少女から夫人を経て、女中から「あの婦人 (das Frauenzimmer)」に至る、女性をめぐるリレーを思わせる連想になっている — をそこに置き換えているのである。

フリーデリケの名はこうして一部削除を被ったが、その一方で、フリーデリケ・ブリオーンとの結びつきは、創作によって補われ、強められている。オーベルリン夫人への問いかけの後、レンツは心ここにあらずの様子で、求められもしないのに「あの婦人」の記憶を語る。

あの方はまったくの子どものような方でした。あの方には、世界は広すぎたので、自分のなかに引き込まれたのです。屋敷全体のなかからもっとも狭い場所を探されました。そうして自分の幸福はこの小さな点にのみあると言わんばかりに、そこにいらっしやったのです。そ

のうち、わたしも同じ気持ちになりました。わたしも子どものように遊び回れたかもしれません。今やわたしにはとても狭い (so eng), 狭すぎるのです。いいですか、わたしはときどき両手で天に触れてしまうように思うことがあるのです。(21)

この「狭さ (Engigkeit)」は、「あの婦人」, すなわちフリーデリケ・ブリーオンとレンツを結びつける心理的かつ身体的記憶であるが、フーディで亡くなった子どもを偲んで墓参したときに、レンツは再び「狭さ」に襲われる、「やがて彼 (レンツ — 引用者注) の歩みは遅くなり、四肢がひどく弱ったと訴えた。それから絶望的な素早さで歩き出すと、風景が彼の不安をあおった。風景は狭すぎて (so eng) あらゆるものにぶつかってしまいそうだった」(26)。とすれば、女性をたすきにして繋がれてゆくエピソードは、レンツに「あの婦人」が亡くなったという確信を強めさせてゆく(27) 働きをしていると言えよう。なお、やはり二人を結ぶ身体的記憶として言い添えておきたいのは、文字通り「体の痛み (physischer Schmerz)」である。レンツは先の引用箇所続けて言う、「わたしはよく体の痛みを感じるように思います。それも、いつも彼女 (あの婦人 — 引用者注) を抱いていた左脇や腕が痛むのです」(21)。これに符合するかのよう、窓から飛び降りたレンツは、「右手で左腕を抱えて」オーベルリーンの前に姿を見せる(25)。

議論をひとまず整理しておく、先行テキスト群に書き込まれ、じっさいの症状としても手記に報告されていた連想 — フリーデリケ連想とも言うべき「狂気」の発作の一因は、ビューヒナーには採用されなかった。その結果、子どもの死とそれに対する罪責感からは、連想を介した間接的因果関係が失われた。代わりに、少女との出会いを契機として「あの婦人」の記憶、さらにはその象徴的な死に至る暗示的な連関が導入され、「狂気」の発作の引き金は、フリーデリケ・ブリーオン一人に集約されることになった。変更に至ったビューヒナーの意図するところは推測の域を出ないが、先のオーベルリーンの独自の位置づけも加味して考えるならば、少なくとも一次資料や伝記資料が喧伝した「病」を上書きしようと試みたのは確かである。では、上書きの行き着く先は、どこにあったのだろうか。

これまでたどってきたように、レンツの「病」および「狂気」は、狂おしい愛に原因があるのだとも、「時代精神」に冒されたのだとも、はたまた性格と線引きの難しい「心気症」、怠惰に由来する「憂鬱症」に原因があるのだと解されてきた。これらに、「頭がおかしい (es steht ihm mit dem Kopf nicht recht)」⁴¹⁾ など、原因にこだわらない直情的な表現を含めれば、「病」を言い当てようとする例はさらに増える。内因的にせよ、外因的にせよ、最終的に荒廃に至らざるを得ない病像 — それは前近代の精神病理学一般に通弊する「不治の病」としての狂気だった — に対し、ビューヒナーは、可変的な病像を提示しようとした。それは、人物の関係やエピソードの関係などの作中内の関係性において作動し、さらにそうした諸関係が形作る過程を経る病像であった。分かりやすく言い換えると、たとえば、断片でのオーベルリーンの一挙手一投足が異なれば、少女との出会いから続く一連の出来事の連鎖がなかったならば、といった仮定(「ならば」)によって変わりうる病像だった。ビューヒナーは、まったく新しい「病」 — いわば開か

れた「病」を創ることで、「狂気」をめぐる言説のせめぎ合いに「介入」を試みたのである⁴²⁾。

おわりに

本稿では、読解の基礎的な作業として、断片『レンツ』執筆以前、とくに直前に現れた「病」をめぐる言説を引き合いに出して、断片に加えられた改変とその効果を明らかにした。ビューヒナーが資料を自在に利用して、レンツの「病」およびその「機制」を創作した事実がこれにより証明された。「病」が創出されたということは、なにより断片の叙述が、今日の「精神病理学」ないしは「病跡学」の学的説明には還元され得ないことを意味する。ビューヒナーの病めるレンツと、現実に生きた病める劇作家レンツとは、重なりあう部分が皆無とは言わないまでも、同一視はできないからである。しかしそれでも、このように総括するには、さらにレンツの、そしてビューヒナーの同時代の「病」をめぐる言説、一例を挙げれば「Manie (精神錯乱/躁病)」なども併せて検討しなければなるまい。

他方で、今回の再読を通じて、ビューヒナーのテキスト群は、(前)近代精神医学の言説のみならず、他の関連する言説と並列関係にあったとの感触も得た。ここで言う並列関係とは、あるテキストの間テキスト性のみを指すのではなく、間テキスト性は前提としつつ、広義の力関係をも含んだ複層的な関係を指す。『ヴォイツェク *Woyzeck*』に見られるような、狭義での当事者の言説、診断を下す精神医学の言説、そして裁く司法の言説と、それぞれが権力との位置関係において形成されている言説の集合体を考えなければならないのである。この位置関係が、参照やアナロジー、引用や書き換えなどの中立的な操作と被操作をなぞるだけでないの言うまでもない。制度や言説編成にも関わるのである。その意味で、ミシェル・フーコーの『ピエール・リヴィエール — 殺人・狂気・エクリチュール』⁴³⁾を思い起こすのも、あながち的外れではないだろう。奇しくも、本書で扱われるのは、ヴォイツェク事件と同じく19世紀に起きた「狂人」による犯行だからである。フーコーらは、事件を伝えるメディアの言説と、精神鑑定をした精神科医の言説、さらに刑量を定める司法の言説に、凶行に及んだリヴィエールの自伝を「並べる」。考察は加えられるものの、テキストそのもの読解は、完全に読者にゆだねられている。反精神医学を掲げる思想家ならではの戦略だが、ビューヒナーのテキストに向き合うのも、こうした言説の複相性に対峙するのに似ていないだろうか。

いずれにせよ、基礎作業を終えた今、この仮説の具体的な検討については次の機会にゆずりたい。むしろここでは、本稿が依拠した同時代の言説をほとんど顧みず、現代的観点からのみ読解を試みる傾向について付言しておきたい。レンツの「病」が、今日では統合失調症 (Schizophrenie) と目されると、本稿冒頭で述べておいたが、近年はこの診断を論述の大前提にすえた上で、断片を読み解こうとする動きが、ことに若手の研究者、ないしは学生間で、広く共有されている。2002年から2009年までの、わずか七年間を見ただけでも、統合失調症を取り上げるモノグラフは、管見では四本にも及ぶ⁴⁴⁾。何しろ学生の課題めいたものも含むため、タイト

ルに統合失調症を掲げながら、本論では一切触れない稚拙なものもあるが、ヤスパース (Karl Theodor Jaspers) の「了解 (Verstehen)」概念を修正し、ハイデルベルクを本拠として一学派を形成した精神科医クルト・シュナイダー (Kurt Schneider) の症候論を引き合いに出す、比較的秀逸な論文もある。

だがしかし、統合失調症に対して、現存在分析や人間学的アプローチが試みられて久しい今日、そのシュナイダーでさえすでに歴史の領域に属している⁴⁵⁾。あえてシュナイダーに立ち返ろうとするならば、その学問的意義は当然のごとく説かれなければならないが、この点は一切不問にされている。それ以上に問題なのは、これらの論文「的な」ものが無条件に採用している「病跡学」であろう。精神病、ことに統合失調症は、主観と客観、そして間主観とも言うべき、総合的なデータによって診断されるが、なかでも特有なのが、医師と患者の間に生じる「分裂病くささ Praekoxgefühl」(H. C. リュムケ) であるとされる⁴⁶⁾。とすれば、病跡学以前に、統合失調症という診断を下すにあたって、そうした間主観的な判断が必要となるが、言語資料——しかも、単なる言語的資料ではない、言語がきわめて強度に行使された文学作品の文章に対峙して、間主観など成立すべくもない。断片『レンツ』のみならず、他のさまざまな資料を駆使しても、言い得るのはレンツの病が「統合失調症と目される」という推察だけである。もう一度繰り返そう、ビューヒナーはレンツの「病」を創出したのであって、その症候を描いたのではないと。病跡学のアプローチは、この意味で再検討されなければなるまい。

註

- 1) J. M. R. レンツ (佐藤研一訳) 『喜劇 家庭教師／軍人たち』(鳥影社) 2013年, 227頁以下。
- 2) 前掲書, 230頁以下。
- 3) 近代精神医学の父、フィリップ・ピネルが名声を確立した二冊の著書、『哲学的疾病分類学』は1798年、『精神病あるいは躁病に関する医学的・哲学的概論』は1801年、いずれもレンツ亡き後に刊行された。ピエール・ピシヨー (帯木蓬生・大西守訳) 『精神医学の二十世紀』(新潮社) 1999年、ジャック・オックマン (阿部恵一郎訳) 『精神医学の歴史』(白水社) 2007年などを参照のこと。
- 4) Burghard Dedner / Hubert Gersch / Ariane Martin (Hrsg.): *“Lenzens Verrückung“. Chronik und Dokumente zu J. M. R. Lenz von Herbst 1777 bis Frühjahr 1778.* Tübingen 1999, S. 1.
- 5) Walter Hettche (Hrsg.): J. W. Goethe: *Dichtung und Wahrheit. Aus meinem Leben. Durchgesehene und bibliographisch ergänzte Ausgabe.* Stuttgart 2012, S. 647.
- 6) J. M. R. レンツ, 前掲書, 240頁以下。
- 7) ドイツ演劇研究の泰斗であり、レンツをいち早く本邦に紹介し、かつビューヒナー作品の邦訳も手がけている岩淵達治は、ビューヒナーの『ダントンの死』と『ヴォイツェク』は、レンツの戯曲に明らかに影響を受けていると指摘している。とくに『ヴォイツェク』とレンツの『軍人たち』には、市民悲劇というテーマ、ならびに作劇法の面で、共通点が多いという。ビューヒナー (岩淵達治訳) 『ヴォイツェク ダントンの死 レンツ』(岩波書店) 2013年, 285頁以下、および339頁以下。
- 8) ビューヒナーの断片『レンツ』は、次の版に依る。Hubert Gersch (Hrsg.): *Georg Büchner*

Lenz. Studienausgabe mit Quellenanhang und Nachwort. Stuttgart 2012. 牧師オーベルリーンの手記（後述）も同版に再録されているため、同じくこの版に依る。なお、引用に際しては、煩雑さを避けるため、いずれのテキストとも（ ）内に頁数を記す。

- 9) Goethe, S. 531f., 642ff. なお、この節の論述は、とくに挙げない限り次の文献に依る。Roland Borgards: „Lenz“. In: Roland Borgards / Harald Neumeyer: *Büchner-Handbuch. Leben-Werk-Wirkung.* Stuttgart / Weimar 2009, S. 51-74.
- 10) Goethe, S. 644.
- 11) 第三節で詳述するが、シュレッサーと親交のあった宮廷顧問ツィンク (Friedrich Freiherr von Zink) は、1778年4月4日付けの書簡のなかで、コルネーリアの悲報に接したレンツの奇行を報告している (Burghard Dedner / Hubert Gersch / Ariane Martin (Hrsg.), S. 174.)。それによると、レンツはコルネーリアの「墓を暴こうとし」、彼女の死因が「経過観察 (Verwahrlosung)」であると何処からか耳にすると、診察した医師に「殺してやる」と詰め寄ったという。
- 12) Goethe, S. 643. なお、ボルガルツは、引き合いに出された「経験心理学 (Empirische Psychologie)」が、ゲーテの説明原理 (Disziplin) であったことを確認した上で、この原理から、広範囲にわたって歴史的変容を被った「人格構造 (Persönlichkeitsstrukturen)」—— むろん、ここでは「変化」を被ったレンツの成れの果てを意味する—— が説明されるという。これにより、従前の善と悪という道徳的・神学的カテゴリーを介した自己制御に代わり、自らで自らを律する自己が導入される (S. 56.)。この議論は、疾風怒濤期の精神史、および啓蒙主義の理性の見直しにも関わる重要な議論であるが、ここではテーマとの関連上、また紙幅の都合上、詳しく立ち入らない。
- 13) 「もしかすると、この仮説にもとづいて彼 (レンツ — 引用者注) の人生の歩みを、彼が狂気に自失する時にいたるまで、なんらかの形で可視化できる日が来るかもしれない」 (Goethe, S. 645.)
- 14) なお、手記そのものは、ビューヒナーの死後、1839年にアウグストの手によって刊行された。ビューヒナーは、アウグストから手記の写しを得て、それにもとづいて断片の執筆に取りかかった。本稿では、「文献学的に」修復された手記を比較に用いるが、それはアウグストがビューヒナーの執筆を知っていたと推測されるからである。事実、ビューヒナーは劇作家レンツを題材とした作品を、早い段階からグツコウ (Karl Ferdinand Gutzkow) に促されていた。一方で、アウグストがオーベルリーンの手記を出版しようと意図していたことも推察される。兄のエーレンフリートは、1831年にオーベルリーンの伝記 (Daniel Ehrenfried Stöber: *Vie de J. F. Oberlin, Pasteur à Waldbach.* Paris / Straßburg / London 1831.) を上梓し、すぐ述べるように同年には弟アウグストも雑誌にオーベルリーンの触れたレンツの伝記を発表しているからである。したがって、ビューヒナーの仮想的読者も、この手記にアクセスする可能性があったと想定して—— 少なくとも本稿第三節で扱う書き換えの様相を考慮すれば、ビューヒナーは想定していたものとして—— 論を進める。
- 15) 断片『レンツ』の、同時代の「病」の言説への介入の全容を明らかにするには、ビューヒナーが触れ得た当時の精神医学の状況をも考慮しなければならない。本稿では、あくまで基礎作業として、断片構想時に現れた二つの言説にのみ論点を絞る。
- 16) 書簡の日付は、引用された記事には記載されていない。前掲のレンツの資料集成 (Burghard Dedner / Hubert Gersch / Ariane Martin (Hrsg.), S. 166.) に依る。
- 17) Augst Stöber: Der Dichter Lenz. Mittheilungen [sic]. In: *Morgenblatt für gebildete Stände* (1831) S. 997f., S. 1001-1003. なお、引用箇所は 1002 頁。
- 18) Wolf Lotter: *Die Heilung der Hypochonder.* (http://www.brandeins.de/uploads/tx_b4/052_ein_gesundheit.pdf.) 2015年2月5日に閲覧。

- 19) 宮岡等「心気症・身体表現性障害」, 『治療』(南山堂) 91増刊号所収, 2009年, 1282~1285頁。
- 20) August Stöber, S. 1002.
- 21) 原語の「Leib und Seele」は、レンツの病状が、精神だけでなく、信仰にも関わることから、訳出したように二重の意味に解される。
- 22) August Stöber, ebd.
- 23) この手の「流行本」としては、ゲーテの『若きウェルテルの悩み』が容易に連想されるが、この疾風怒濤期を代表する作品を、オーベルリーンが読んでいたかどうかは明らかではない。
- 24) Borgards, S. 57.
- 25) オーベルリーンは、住民の「夢 (Träume)」や「予感 (Ahnungen)」に耳を傾けながら、「道を敷き、運河を掘り、学校を訪ねた」(Wege angelegt, Kanäle gegraben, die Schule besucht)と、インフラの整備も兼ねた視察を行っている(9)。
- 26) Burghard Dedner / Hubert Gersch / Ariane Martin (Hrsg.), S. 33f.
- 27) Ebd., S. 38, 130ff. これらの伝記資料は、オーベルリーンの手記では触れられていない。後述するように、手記はレンツの処遇に対する「弁明 (Rechtfertigung)」の性格を備えており、元来は周囲の親しい人々に向けて記されたものだったからである。もっとも、ビューヒナーおよび仮想される読者が、先のフランス語の伝記(註14参照)を読んでいただ可能性は排除できない。
- 28) 1804年に商人のハインリヒ・ボスハルト (Heinrich Boßhard) が記した回想に依る。なお、引用箇所は、シュトゥーパーについて言ったもので、オーベルリーンは「その尊敬すべき後継者」と記され、先代の成し遂げたことを墨守するにとどまらず、住民に地誌や歴史などの学問に加え、いかに効率的に「パンを稼ぐか」を教えるなど、いわゆる教区の近代化に積極的に寄与したとされる。Burghard Dedner / Hubert Gersch / Ariane Martin (Hrsg.), S. 201.
- 29) Milan Scheidegger: *Geschichte und Philosophie der Melancholie. Von den Abwandlungen des Melancholiebegriffs zum Wesenskern eines Seelenphänomens*. 2013, S. 8. (http://www.milans.name/home/philosophy_files/Melancholie_web.pdf) 2015年2月6日に閲覧。
- 30) この点については、18世紀後半に猖獗をきわめた「宗教的憂鬱 (religiöse Melancholie)」の症状に関する記述を、ビューヒナーが写しとったとの見方もある (Carolin Seling-Dietz: Lenz als Rekonstruktion eines Falls „religiöser Melancholie“. In: *Georg Büchner Jahrbuch* 9 (1995–1999) 2000, S. 188–236.)。この症状と、同時代の他の「狂気」の診断、さらにはそれらと断片の叙述と関係については、紙幅の関係上、今回の論考にゆずり、次の点を指摘するにとどめた。ビューヒナーの叙述は、たしかに「宗教的憂鬱」の症候論を想起させるが、その叙述を支持した「自由主義的な精神科医 (liebrale Psychiater)」が推進した「身体因的鑑定 (somatische Ursachenbestimmung)」を採用していない (Borgards S. 67)。つまり、当時の「宗教的憂鬱」の診断の付置関係からも逸脱しているのである。
- 31) 断片にも登場するプフェツフェル (Gottlieb Konrad Pfeffel) の、1778年2月6日の書簡からの引用。Burghard Dedner / Hubert Gersch / Ariane Martin (Hrsg.), S. 144.
- 32) Augst Stöber, S. 1001.
- 33) 1778年1月22日付けのラファーター宛の書簡を指す。書簡は資料集成に全文が掲載されている。Burghard Dedner / Hubert Gersch / Ariane Martin (Hrsg.), S. 126.
- 34) 「精神を維持しようとする本能が彼(レンツ — 引用者注)を駆り立てた。彼はオーベルリーンの腕に身を投げ、そのなかへ押し入っていきたくともいうように (als wolle er sich in ihm drängen)、彼にしがみついた。オーベルリーンこそ彼のために生きてくれる唯一の人であり、このオーベルリーンを介して、レンツにはふたたび人生の啓示が伝えられるのだった。」(28f.) 傍点は引用者による。
- 35) 「八日に」長らく床についていたレンツは、牧師に「空気の凄まじい重さ (ungeheure

- Schwer)」を訴え、起き上がれないと言う。「オーベルリーンは彼を励ましたが、彼の状態は一向に変わらず、一日の大半をそのままで過ごし、食事もとらなかった」(29f)。傍点は引用者による。ここに至って、オーベルリーンはレンツへ影響力を失っている。
- 36) ただし、オーベルリーンが手記で吐露する弁明からは、その治療の試み(とその失敗)が周囲から完全には理解されないだろうという、猜疑心に似たものを読み取るのは困難ではない(49)。
- 37) August Stöber, S. 1001.
- 38) Burghard Dedner / Hubert Gersch / Ariane Martin (Hrsg.), S. 40.
- 39) Ebd., S. 41f.
- 40) 「オーベルリーンの奥様、あの女性がどうしているのか、お願いですから教えていただけませんか。あの方の運命は、わたしの心に鉄のかたまりのようにのしかかっているのです」(20)。すぐに述べるように、この台詞は、オーベルリーンの手記では、牧師とのやり取りで発せられていた(40)。
- 41) Burghard Dedner / Hubert Gersch / Ariane Martin (Hrsg.), S. 163.
- 42) この点で、断片『レンツ』においては、「苦悩の原因への問いは背景に退き」、「それに代わって、精神を病んでゆく経過の描写 (die Darstellung des Ablaufes der seelischen Erkrankung) が重要性を増す」とするロイヒラインの指摘は正しい。「病そのものは、もはや単なる容体 (Zustand) として定義される、多かれ少なかれ不変的な (invariabel) 症状とは解されない。そうではなく、入れ替わり立ち替わり変化する (sich abwechselnd und ablösend) 症状が特徴をもって進行する過程 (Prozeß) と解されるのである」。Georg Reuchlein: „... als jage der Wahnsinn auf Rossen hinter ihm“. Zur Geschichtlichkeit von Georg Büchners Modernität: Eine Archäologie der Darstellung seelischen Leidens im *Lenz*. In: Barbara Neymeyr (Hrsg.): *Georg Büchner. Neue Wege der Forschung*. Darmstadt 2013, S. 179. ただし、ロイヒラインは、分析を語り手と語り人に限定し、本稿が検討した牧師とエピソード連想の役割には立ち入っていない。
- 43) ミシェル・フーコー他(慎改康之・柵瀬宏平訳)『ピエール・リヴィエール ― 殺人・狂気・エクリチュール』(河出書房) 2010年。
- 44) Sascha Bechmann: *Büchners Lenz - Eine vollgütige klinische Pathographie*. München 2002; Melanie Feurle: *Die Darstellung der Schizophrenie in Georg Büchners „Lenz“-Erzählung und deren Zusammenhang mit dem im Text entfalteten Natur- und Menschenbild*. München 2002; Aljona Merk: *Literarische Wahnsinnsdarstellungen in Georg Büchners „Lenz“*. München 2007; Miriam Burkert: *Georg Büchner: Die Schizophrenie der Figur Lenz*. München 2009.
- 45) 木村敏『新編 分裂病の現象学』(筑摩書房) 2012年。とくに第二章の二節「ドイツ語圏における精神病理学の現況」(64~128頁)を参照のこと。
- 46) 「ふつう、専門医が分裂病者を診断する場合、三種類のデータを総合して判断の基礎にすえる。ひとつは、病者自身の体験するなまの主観的体験であり、もうひとつは病者の日常の生活様式や言動、性格の変化など客観的にとらえられる徴候、そして第三が医師と病者とのあいだで生まれる現象、つまり右に述べた疎通生(ラ ポール)や接触(コンタクト)、または感情的印象に関するデータであって、これは診断のうえで前二者にまさるともおとらぬ重要性をもっている。(中略) むろん、分裂病以外のほかの精神病や神経症でもそれなりの特有な感じをそなえているはずであるが、分裂病の場合ほどの特異さであらわれることはないし、また問題にもされない。逆にいえばそれほど「分裂病くささ」というものはきわだっているものであって、このことはまた、分裂病という病態が知能や感情などという個々の心理的機能の障害でなく人間の在り方の全体的変化に由来していること、またさらにすすんで、「人と人のあいだでもっとも特有に現れてくるところの病い」、もっと簡略に言えば、「人と人のあいだで成立する病態」であることを如実に物語っているのではあるまいか」(宮本忠雄『精神分裂病の世界』(紀

伊国屋書店) 2003 年, 69 頁以下)。ただし, このようにリュムケの「分裂病くささ」を, 統合失調症の特異点とする宮本にして, 統合失調症の患者が体験する世界を例示するにあたっては, 文学作品などの事例を, きわめて素朴に利用している。なお, 統合失調症を「個別化原理の危機」とみる木村(註 44)は, 「プレコックスゲフェール」を「[他者の根本的拒絶という不自然な手段による個別化確立への努力]という分裂病性の根源的事態が病者との出会いを通じてわれわれ自身の自覚に映じたもの」と定義しなおしている(木村, 前掲書, 235 頁)。

参考文献

- Sascha Bechmann: *Büchners Lenz - Eine vollgütige klinische Pathographie*. München 2002.
- Roland Borgards: „Lenz“. In: Roland Borgards / Harald Neumeyer: *Büchner-Handbuch. Leben-Werk-Wirkung*. Stuttgart / Weimar 2009, S. 51-74.
- Miriam Burkert: *Georg Büchner: Die Schizophrenie der Figur Lenz*. München 2009.
- Burghard Dedner / Hubert Gersch / Ariane Martin (Hrsg.): „Lenzens Verrückung“ *Chronik und Dokumente zu J. M. R. Lenz von Herbst 1777 bis Frühjahr 1778*. Tübingen 1999.
- Melanie Feurle: *Die Darstellung der Schizophrenie in Georg Büchners „Lenz“-Erzählung und deren Zusammenhang mit dem im Text entfalteten Natur- und Menschenbild*. München 2002.
- Hubert Gersch (Hrsg.): *Georg Büchner Lenz. Studienausgabe mit Quellenanhang und Nachwort*. Stuttgart 2012.
- Walter Hettche (Hrsg.): J. W. Goethe: *Dichtung und Wahrheit. Aus meinem Leben. Durchgesehene und bibliographisch ergänzte Ausgabe*. Stuttgart 2012.
- Wolf Lotter: *Die Heilung der Hypochonder*. (http://www.brandeins.de/uploads/tx_b4/052_einl_gesundheit.pdf)
- Aljona Merk: *Literarische Wahnsinnsdarstellungen in Georg Büchners „Lenz“*. München 2007.
- Georg Reuchlein: „... als jage der Wahnsinn auf Rossen hinter ihm“. Zur Geschichtlichkeit von Georg Büchners Modernität: Eine Archäologie der Darstellung seelischen Leidens im *Lenz*. In: Barbara Neymeyr (Hrsg.): *Georg Büchner. Neue Wege der Forschung*. Darmstadt 2013, S. 172-195.
- Milan Scheidegger: *Geschichte und Philosophie der Melancholie. Von den Abwandlungen des Melancholiebegriffs zum Wesenskern eines Seelenphänomens*. 2013, S. 1-10. (http://www.milans.name/home/philosophy_files/Melancholie_web.pdf)
- Carolin Seling-Dietz: Lenz als Rekonstruktion eines Falls „religiöser Melancholie“. In: *Georg Büchner Jahrbuch* 9 (1995-1999) 2000, S. 188-236.
- August Stöber: Der Dichter Lenz. Mittheilungen [sic]. In: *Morgenblatt für gebildete Stände* (1831) S. 997f., S. 1001-1003.
- Daniel Ehrenfried Stöber: *Vie de J. F. Oberlin, Pasteur à Waldbach*. Paris / Straßburg / London 1831.
- ジャック・オックマン(阿部恵一郎訳)『精神医学の歴史』(白水社) 2007 年。
- 宮本忠雄『精神分裂病の世界』(紀伊国屋書店) 2003 年。
- ピエール・ピション(帯木蓬生・大西守訳)『精神医学の二十世紀』(新潮社) 1999 年。
- ビューヒナー(岩淵達治訳)『ヴォイツェク ダントンの死 レンツ』(岩波書店) 2013 年。
- 木村敏『新編 分裂病の現象学』(筑摩書房) 2012 年。
- ミシェル・フーコー他(慎改康之・柵瀬宏平訳)『ピエール・リヴィエール — 殺人・狂気・エクリチュール』(河出書房) 2010 年。
- 宮岡等「心気症・身体表現性障害」, 『治療』(南山堂) 91 増刊号所収, 2009 年, 1282~1285 頁。
- J. M. R. レンツ(佐藤研一訳)『喜劇 家庭教師/軍人たち』(鳥影社) 2013 年。

